

令和5年度経済学部学生チャレンジプロジェクト事業成果報告書

マップづくりからまちを育てるなえどこプロジェクト

代表 田丸 七海（経済学科 2年生）

（1）目的と概要

プロジェクトの目的は、地域活性化を志している学生たちが出会う場をつくり、交流することで高いモチベーションを維持し、さらにフィールドワークを通して知識や経験を積むことで地域活性化に貢献する学生の育成を目指すことである。概要は、藤塚商店街での活動を通して実践的な経験を積み、自身の成長と共に商店街の発展に貢献することを目指して活動する。

（2）実施期間

令和5年3月1日から令和6年3月1日まで

（3）成果の内容

1) このプロジェクトの具体的な成果

このプロジェクトの成果として、大きく3つ挙げられる。

一つ目は、現地で子供たちを対象としたイベント等の開催である。藤塚商店街での最初の活動として、まず6月に開催された藤塚祭りでの出店を行った。「NPO 法人わがこと」さんと連携して、子供を対象とした輪投げ、射的、お菓子すくいを無料で行った。また、8月に行われた高松祭り前夜祭では、ボーリング、お菓子すくい、藤塚商店街のマスコットを考案してもらってお絵かきコーナーの設置を行った。これから藤塚商店街で活動していくために、なえどこというプロジェクトを知ってもらう機会となるように心がけた。



夏休みには、「夏休み寺子屋ふじつか教室」を開催した。これは藤塚神社で小学生の夏休みの宿題をサポートするものである。応募していただいた10名の小学生に宿題を教えた後、小学生と一緒にフルーツポンチづくりを行った。後日、商店街の方や、参加した小学生の保護者の方からの好評の声をいただくことが出来た。



二つ目は、藤塚商店街の情報発信である。藤塚商店街の情報発信を進めるにあたって、まず、藤塚商店街のマスコットを制作した。これは、藤塚商店街のInstagramでの投稿や、チラシの作成時に活用することで、より印象づけることを目的とする。マスコットのデザインは、8月に開催された「高松祭り前夜祭」で子供たちから募集したイラストを参考にしたり、モチーフにする動物の意味を調べたりすることで、私たちや子供たち、商店街が共に成長していこうという意味を込めたデザインになるように試行錯誤した。デザインを商店会の会長に提案し、現在は、藤塚商店街の方々から名前を募集している段階である。



次に、藤塚商店街の各店舗をより多くの人に知ってもらうために、「おととせんべい」と「藤塚町マルシェ」に取材をし、投稿としてInstagramに掲載した。投稿だけでなくリール動画も制作することで、藤塚町マルシェのリール動画は約200回再生され、藤塚商店街を知らなかった人々にも見てもらうことが出来たと思う。



三つ目は、今後なえどこの象徴となるようなワークショップの考案である。今後なえどこならでのワークショップを開催していくために、本来捨てられるものや自然のものを活用したワークショップが出来ないかと考えたところ、まず、イノシシの牙を使ったアクセサリ作りの案が出たが、アクセサリ作りをレクチャーしていただく人の都合が合わず断念した。次に、イノシシの毛を活用できないかという藤塚町マルシェの中木さんから提案により、羊毛フェルト作家さんを紹介していただいた。しかし、作家さんもイノシシの毛をフェルトとして活用することに苦戦され、イノシシの毛をメインで使用できるような案は未だ出ていない。そこで、私たち自身で話し合った結果、「スケルトンリーフ」作りを開始した。スケルトンリーフは、葉の葉肉を取り除いて葉脈のみにしたものであり、小学生の自由研究の題材として用いられたり、アクセサリとして活用されたりしている。私たちは、落ち葉を利用してスケルトンリーフをつくり、色付けしてレジンで硬化することでストラップを作ろうと考えている。場所を問わず開催しやすく小さな子供でも楽しめるようなワークショップになるように、私たち自身が何度も作ることや、試験的に大学でワークショップを開催することなどを通して、これから継続して開催していくワークショップの土台をしっかりと固めたいと思う。



前期は活動の軸がブレてしまっていたため、今後なえどこの活動において何を主軸として活動していくかについて話し合った結果、子供との関りに重きを置き、子供向けのワークショップなどを開催していくという方向に定まりつつある。そこで、2024年の4月から藤塚商店街で子ども食堂をオープンする予定である小笠原さんとお話しする機会をいただいた。子ども食堂は3月あたりから試験的に運営する予定であるため、今後どのような形で関わらせていただくか、子ども食堂の運営に関わる他の団体との兼ね合いも考慮した上で決めていきたいと思う。なえどこととしての考えでは、毎週決まった曜日にお手伝いをすることや、毎月一回ワークショップを開催することを考えている。

2)このプロジェクトが大学や地域社会の活性化、学業の振興等に対してもたらした影響
あるいは効果

藤塚商店街は少子高齢化により活気が失われている。商店街の店舗はほとんどが高齢の店主であり、商店会の方は活気が失われた商店街の再生を諦めていると語っていた。しかしながら、かつて子供たちで賑わっていた商店街の姿をもう一度見たい、藤塚祭りなどを通して子供たちを楽しませたいという熱い思いが伝わり、私たちもその思いに応えるために様々な活動に挑戦した。その中でも、「夏休み寺子屋ふじつか教室」の開催と藤塚商店街のインスタグラムの開設は、地域の活性化に良い影響をもたらしたと考える。藤塚商店街は、中央に二車線の道路が通っており歩道が非常に狭いため、藤塚商店街を集いの場として利用する機会は少ないだろう。子供たちが通学路として通る姿はよく目にするが、そのため、「夏休み寺子屋ふじつか教室」に参加した子供たちが藤塚商店街や藤塚神社により親しみを感じられるような機会をつくることが出来たと思う。また、集まった10名の子供のうち、6名は藤塚商店街のインスタグラムを通して応募していただいたことから、インスタグラムの開設は、より多くの人に藤塚商店街を知ってもらう効果を得るだけでなく、近隣に住む人々が改めて藤塚商店街のことを知り、魅力を再発見するツールとしての役割を担うことが出来るようになって感じた。

(4) プロジェクトから学んだこと

なえどこは今年度から新たな取り組みとして、商店街を拠点とした活動を開始したが、私たちの中で明確な目的や目標を作ることが出来ていなかったため、前期は活動の軸がブレてしまっていた。それ故、商店会の方からの提案や要望などをそのまま受け入れて活動してしまっただけも多く、私たち自身が目的を持って自主的に活動を行うことが出来ていなかったと感じる。この反省から、後期は私たちがなえどこが何を行うべきか、何を目標とするかについて話し合い、これからの活動の方向性を定めて取り組むことが出来た。しかし、今後なえどこが強みとして活用していくワークショップを考案する期間は商店街へ行く機会があまりなかったため、商店街の方々との関わりが少なくなってしまった。そのため、来年度からは現地での活動に力を入れていきたいと思う。

(5) 実施メンバー

代表	田丸 七海	(経済学部・2年)
	岡 桃子	(経済学部・2年)
	宇野 早織	(経済学部・1年)
	竹内 きら	(経済学部・1年)
	小泉 凜奈	(経済学部・1年)

(6) 執行経費内訳書

配分予算額		70,630円 (配分された額)		
執行経費 (品目など)	数量	単価 (円)	金額 (円)	備考
スツール 6脚セット	2	12,800	25,600	
ホワイトボードマーカー黒	10	76	760	
ホワイトボードマーカー赤	10	76	760	
色画用紙 B4	2	494	988	
UV-LED レジン 星の雫	5	1,419	7,095	
LED ハンディライト	5	692	3,460	
UV-LED レジン 星の雫(詰め替え用)	2	6,589	13,178	
ニトリルゴム手袋	2	769	1,538	
フェルトパンチャー	5	879	4,395	
フェルト羊毛	2	1,339	2,678	
ステンレスピンセット	3	175	525	
ピンバイス収納式	1	1,859	1,859	
カン付ナスカンストラップ	1	382	382	
スティックスタンプ	1	729	729	
合計			63,947	